

## 九州学院の創設秘話

藤本  
誠

創設者ブラウン宣教師と初代院長・遠山参良の運命的出会い

九州学院の母教会である日本福音ルーテル熊本教会は、一八九八（明治三二）年一〇月二日に山内直丸牧師夫妻と五高生・副島松一（花陵会学生）によつて設立された。同年一月一五日に、アメリカ南部

L・ブラウンは、機会あるごとに熊本を訪れ、ルーテル熊本教会の伝道を援けていた。そのブラウンが、明治三二年夏、神の摂理による邂逅とでも称すべき運命的な出会いをする。相手は、後に九州学院初代院長となる遠山参良である。

一九三一（昭和六）年七月一八日夜、九州学院の『創立二十周年記念誌』（稻富肇編輯、昭和六年一〇月一日発行）に収録するため院長宅で行なわれた座談会「その昔を語る」で、その時のブラウンとの出会いを遠山院長は次のように回顧している。



教会一致シノツド(教区)から派遣された宣教師として佐賀に着任していたC・

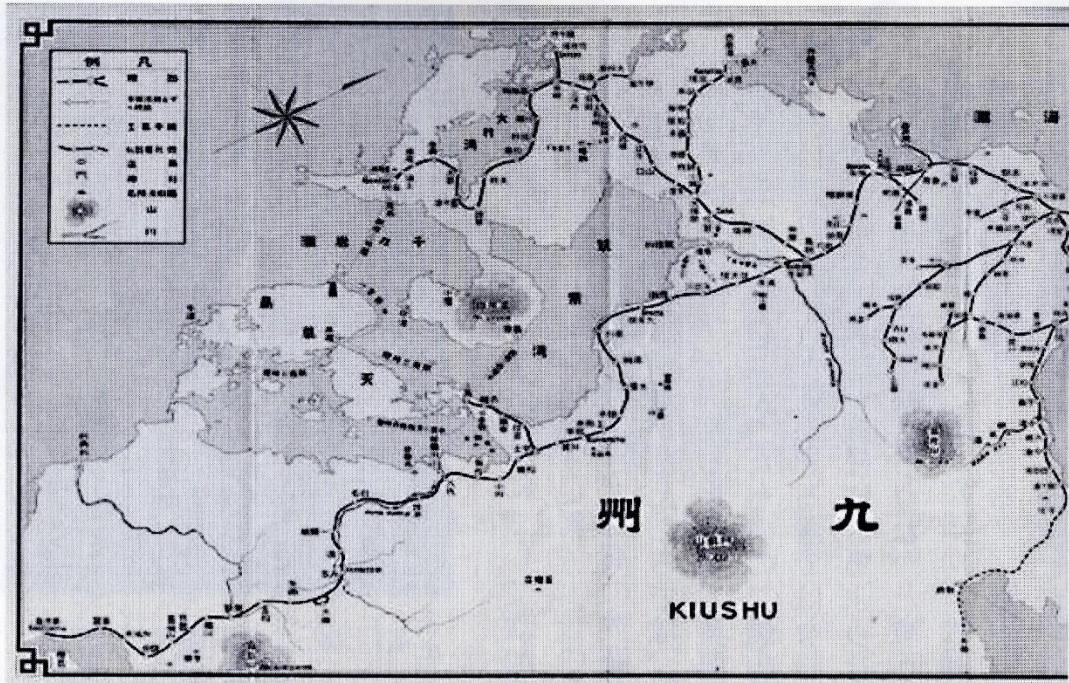
して来て、恰度五高に外国语の時間が足らぬので、ブラウンさんに頼んで持つて貰つた」(同誌、七一页)。

明治三二年七月（中旬か）、遠山は第五高等学校英語科講師招聘の件で、当時の英語科主任であつた夏目金之助（漱石）教授との面会のため、長崎から熊本に赴いた。同年六月二一日に英語科主任に就任していた漱石は、第一高等学校に転ずることになつた親友・山川信次郎の後任を探していたのである。その漱石に遠山を周旋したのは、五高英語科の木村邦彦であると推察される。木村は遠山と鎮西学館の同窓で、遠山の三年後輩に当る。『第五高等学校一覧 自明治卅二年 至明治卅三年』の職員録（明治三二年九月末日現在）によると、五高の日本人教師で外国の大学から学位を授与されているのは木村と遠山の二人だけで、木村邦彦が「英語 バチエラーチ、ヲフ、フキロソフキー（米國テムパレンス大學）木村邦彦 熊本平民」、遠山が「英語 マスター、オフ、サイエンス（米國ウェスレヤン大學） 熊本平民」と記されている。因みに漱石は「英語 全英語科主任 評議員 正七位文學士 夏目金之助 北海道平民」となっている。アメリカのテンパレンス大学から「哲學士（Bachelor of Philosophy）」の学位を授与された木村が、同じくオハイオ・ウェスレヤン大

学から「理學修士（Master of Science）」の学位を授与され、帰国後、鎮西学館に復職して先輩の遠山を漱石に直接周旋したことは想像に難くない。

遠山は漱石との面会を終えると五高英語科講師招聘を受諾し、長崎への帰途についた。郷里の鏡町には立ち寄つたのだろうか。明治末の『九州鐵道線路案内』（遠山參良先生藏書遺本）によると、九州鐵道で上熊本駅（池田駅）から鳥栖経由で長崎線の佐賀まで五時間程、更に長崎まで五時間近く掛かり、熊本から長崎まで一〇時間程度の列車の旅となる。

長崎には既に先進新教各派の教会や宣教師館があり、メソジスト系の鎮西学館や活水高等女学校が存立していた。アメリカのミッショニ・ボードからの船便は横浜経由で長崎に届く。ブラウンは何かつけ長崎に出向いていた。ブラウンが佐賀駅から長崎行きの列車に乗り込むと、周囲の乗客とはやや異色の紳士然とした人物の前の座席に、誘われるよう腰を下ろした。アメリカ仕込みの流暢な英語で話し掛けたクリスチヤンの紳士に若きブラウン（二十五歳）は瞠目し、やがて話が弾み意気投合したに違いない。出島美以教会（出島メソジスト教会）でデビソン宣教師らの通訳を担い、自ら説教や演説までこなすミッショニ・スクールの青年教師・遠山參良（三三歳）との思いがけぬ出会いをしたのである。更に遠山は、



明治末の『九州鐵道線路案内』  
(遠山参良先生遺本蔵書)

当時の九州の最高学府・第五高等学校に翌月赴任することになるという。五高のある熊本は、ルーテル教会が熊本教会を拠点として伝道を展開している九州の中心都市で、ブラウンも機会あるごとに伝道に赴いている新天地である。ブラウンはこの遠山との運命的な出会いを、後に神の計らいであったと追憶したに違いない。

夏目金之助（漱石）との面会が契機となつてブラウン宣教師と遠山参良が出会い、それが一二年後の一九一一年（明治四十四年）、九州学院開設に繋がったのである。

遠山は長崎に戻ると、同年七月をもつて鎮西学館教師と活水高等女学校講師を辞任し、翌八月五日、五高に出向した。そして、翌週の八月七日、第五高等学校英語科講師嘱託として赴任したのである。

## 二 五高教授・遠山参良と花陵会、ブラウンの熊本伝道

一九〇〇（明治三十三）年一月二二日、遠山参良は五高教授を拝命し、高等官六等に叙せられている。更に同年七月上旬には、夏目教授の依頼により後任の英語科主任を引き受けることになる。

遠山院長から直接薰陶を受けた山崎貞士（九州学



夏目漱石の英国留学前送別会  
(明治33年7月頃)  
前列右：夏目金之助  
前列左：奥太一郎  
後列左：遠山参良

院第七回卒業生)は、この経緯について次のように記している。

「遠山先生が漱石の後に、五高の英語の主任になつた経緯を伝え聞いたところでは、漱石が内々イギリス留学が決定したので、英語科主任を遠山氏に譲ろうと思つたものの、遠山という人物は簡単に口説き落とせる器ではない。そこで『遠山さん、英語の主任になるような人物は余ツ程の馬鹿か阿呆者だろうね』と漱石がいつた途端、『ではわしがやつたろか』と遠山先生が引き受けたというのである。／漱石は遠山先生の性格を見抜いて、その侠気とか、熊本流でいえば一種のモッコス性をたくみに利用したの

かもしれない。一面遠山先生のさっぱりした虚心坦懐ぶりも察知できようか」(『幾山河』平成七年一一月二一日発行、熊本日日新聞社・「漱石に傾倒させた一人の先生」五六・五八頁)。

「機知の漱石」に対し、「名利をのぞまず、他者のために己を没する遠山氏」と、池永春生第四代院長は「遠山参良先生」(「キリストの証人」昭和四五年一月十五日所収)で評している。

後任を遠山参良に託した漱石は、英国留学のため家族とともに同年七月一八日か一九日に、「鏡、筆と共に、洪水直後で汽車不通の箇所を徒步で、熊本市を去り東京市に」(荒正人『増補改訂漱石研究年表』昭和五九年六月一〇日発行、集英社)向かつた。明治三三年七月四日から一六日にかけて降つた豪雨により熊本は大洪水に襲われ、汽車は各地で不通になり、白川の橋梁は悉く流失し、両岸の交通は途絶したのであった。

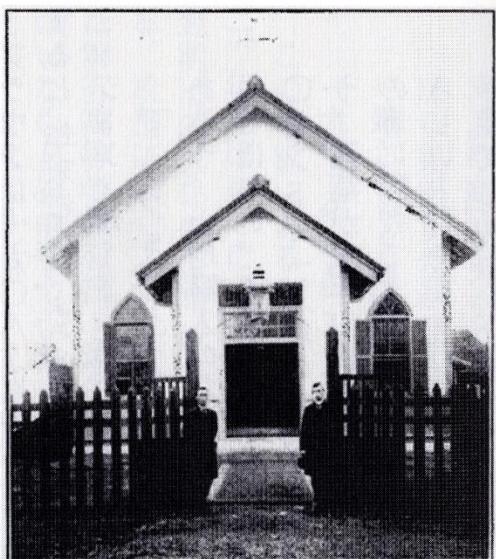
漱石の後を受けて大学予科英語科主任教授に就任し、龍南会の演説部長となつた遠山は人望を集め、花陵会(第五高等学校基督教青年会)でも中心的な指導者となつた。教授に就任した翌月の二月一一日には、早速熊本メソジスト三年坂教会で催された花陵会主催演説会で、一般対象に講演を行なつてゐる。明治三三年は、英國聖公会宣教師ブランドラム

土地購入資金四〇〇ポンド（三九〇〇円）を工面し、借用金の利子二〇〇円も負担していたのである。しかし、ブランドラムは会館の完成を見ることなく、同年一二月三〇日、日本脳炎の療養のため香港の病院へ行く途上の上海で客死したのであった。この花陵会館創設の功労者ブランドラムの追悼会が、翌四年一月六日、各会連合により遠山が会員となつていた熊本メソジスト三年坂教会で行なわれた。



熊本教会講義所前で伝道活動中のブラウン宣教師  
(明治35~37年頃)

が花陵会館（自炊寮）建設のため奔走し、一月二二日には登記を済ませて土地購入を完了させた。ブランドラムが自分の子供のために蓄えておいた教育資金をあてがつて、日本福音ルーテル教会の第一回教役者会が佐賀で開かれた一九〇〇（明治三三）年、熊本在留最初のルーテル教会宣教師として、同年一二月一四日、ブランドラウンが熊本に着任。新屋敷町四三五番地に居を構え、熊本伝道を本格的に開始した。ブランドラウンの熊本での伝道が軌道に乗ると、翌明治三四年一〇月二四日から第五高等学校で英語科嘱託講師として教えることになった。これは前年一二月に亡くなつた聖公会宣教師ブランドラムの後任であった。もちろん遠山自身が語っているように、漱石の後を受け、当時英語科主任に就いていた遠山参良の周旋による。因



Kumamoto Chapel

1905 (明治38) 年6月20日、熊本市水道町に献堂した日本福音ルーテル熊本教会  
左：山内直丸初代牧師  
右：C.L. ブラウン宣教師

みにブラウンの五高講師在任期間は、明治三四年一〇月二四日～三五年八月三一日、明治三七年九月一五日～三九年一二月三一日である。

また、遠山の鎮西学館の後輩・木村邦彦と山内直丸牧師は同郷人（和歌山県出身）で親交があった。遠山が五高に赴任すると、木村を介して山内牧師は遠山とも交わりを結ぶようになった。このブラウン宣教師及び山内牧師と遠山教授との親交が、ルーテル教会と第五高等学校との以後の関係を親密なものにした。これによつてルーテル教会は、熊本で教育事業を興す際の強力な支援を手にする事ができたと言つても過言ではない。

ブラウンが伝道の中でも重要視した日曜学校は、熊本教会の仮教会堂及び講義所で絶えず行なわれていた。また、遠山参良との関係を基盤にした五高の学生への伝道にも力を入れた。明治三六年二月三日に五高瑞邦館で開催された演説競技会に遠山部長からブラウンは招かれ、演説の幕間と終了後にギターの演奏をしている。花陵会の賛助会員にも遠山参良や山内直丸牧師らとともにブラウンも名を連ねておる。花陵会の活動も積極的に支援し、ルーテル教会の浸透を図った。創設期の熊本教会の会員にはブラウンから受洗した花陵会の学生も多数いた。こうして、日本最初のルーセラン・ミッショն・スクール

九州学院の創設へ向けた歩みが始まったのである。

### 三 九州学院の創設へ向けて

ブラウンは予ねてより構想していたジャパン・ミッショն・スクールの実現のため、アメリカ南部一致ルーテル教会の支援を得るべく、一九〇六（明治三九）年五月、一時帰国し、奔走した。そして、六月の南部一致ルーテル教会の総会で、ブラウンが提唱したミッショն・スクールの設立が決議され、学校敷地の購入と校舎の建築のため五万ドルを支出することも決定された。

ブラウンは一九〇八（明治四一）年一二月に帰任すると、年末に次のような手紙を南部一致シノッド・ミッショն・ボード（海外伝道局）宛に送つてゐる。「ミッショն・スクールは熊本に設置するであろう。土地購入のために五〇〇〇ドルを送金してほしい。その資金があれば、一坪当たり五〇セントで一万坪の敷地を購入できるであろう。建築が来年の秋に着工すれば、その次の年の春に開校できることになる。校長として素晴らしい人材を見つけたので、その人と話し合う予定でいる。学校の場所の選定が急務であるし、質の高い能力と経験に富んだ人材の確保が最も



昭和 7 年 3 月、新しい花陵会館が竣工し、4 月の献堂式に遠山参良院長列席。遠山院長は、同年 10 月 9 日に召天する直前までキリスト者として花陵会の指導に携わった。

重要となろう。このような人材を他のミッショントより獲得することは難しいので、公立学校から見出すのが最も良い方法であろう」（南部一致シノッド機関紙「Lutheran Church Visitor」一九〇九年一月二一日）。

この手紙によると、ブラウンは一九〇九（明治四二）年夏頃までに土地を購入して秋建築に着工し、翌明治四三年春に開校する予定でいたと考えられる。校長には、ブラウンが絶対的な信頼を寄せられた第五高等学校教授・遠山参良を置いて外に適任者はいないと確信していた。一八九九（明治三二）年七月、長崎へ帰途中の遠山参良と出会つて以来、熊本での宣教活動や親交を通して、その高潔な人格者の聲咳に接し、ブラウンはそう確信していたのである。遠山参良が周旋したと考えられる熊本高等予備学校（明治四一年九月一五日～四二年六月二六日）の教授陣を見るにつけ、学校設立にとつて最も重要な「質の高い能力と経験に富んだ人材の確保」を図る上でも、遠山の存在は絶大であった。

\*九州学院創立一一〇周年を記念して、本誌次号より創立期の九州学院や創立の精神「敬天愛人」などについて、順次寄稿する予定である。

（ふじもと まこと／九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長）